

地中海

MARE MEDITERRANEUM

2024. 3



令和6年3月1日発行(毎月1回1日発行)第72巻第3号

No.790

創刊理念

文化としての地中海、そうした概念が近代思想の郷愁として最近うかび上ってきた。それは、ローマでも、ギリシャでもなく、エジプトでもない。もっと古い発生的なものだ。別ないいかたをすれば、地中海的なクリマ、明朗で明るく、同時に人間的な感情とつよい同化力。あらゆる大陸の奥地から南下してまた北上した、すべての未開なものを同化してきた大きな力、——それをホメロス以来ピカソでも、ブラックでも、シロニーでも、みなおなじ気持であこがれる。

源泉的精神の、本質的な方向を指向するもの、それが「地中海」である。

地中海

二〇二四年 三月号 (通巻七九〇号)

◇今月の二十首詠……桃の連想

福光敬子 2

■作品

〔A〕

草刈十郎・河野繁子他 4

A

海保奈良繁他 20

B

唐澤美恵子他 52

C

改正大祐他 62

■オリープ集

木村恵子・許田邦子他 38

◇今月の二人

桑田幸一・吉崎壽子 16

●追悼・市原志郎

市原志郎作品三十一首

市原やよひ・選

追悼文

田土成彦・久我田鶴子・鈴木文字

石澤利夫・酒井 牧・市原やよひ

■〈第一歌集を読む〉12

小西美智子歌集『はなかつみ』

一生の時を刻みつつー

大寺智子

◇春のアンソロジー 〈想い〉

箕浦 勳

46

私と短歌との出会い (259)

辰巳洋子 19

■鑑賞・三好直太の歌 8 〈解放戦〉

久我田鶴子 15

◇シルクロード・カフェ — 【責任編集】 木村文字

48

■遊覧寄港へ教科書で習った心に残るお話〉 きゅうとくなおみ

50

■歌壇月旦

「結社はどこへ向かうか」考

玉井綾子

51

■一月号作品批評

A……………滝田靖子・本元由美子

68

浜谷久子・藤川淳子

B……………藤澤元子・藤森巳行

C……………國原喜美子

オリープ集……………田土才恵

今月の二人・作品評

久我田鶴子 18

報告・『さざれ石の会合同歌集』第三集を読む会

斉藤順子 88

最近の歌誌より

〔編集部〕 61

第18期オリープ集選考結果発表

43

クリップ……………90 神田通信……………表3

(表紙デザイン) Tazuko Yuga

桃の連想

福光 敬子

その花のはれやかなれば古代より 桃もものようよう之天天 いい嫁さんだと

桃のような お嫁さんならそらええわ 若うて華やか 桃之天天

桃の花 暮春の初めの晴の日に 色を集めて蕾となれり

ひしもちの白、桃、みどりの春がきた かわいいね、桃。うれしいね、春。

お雛様お花をあげましょ桃の花 妖しく可愛し 桃のはな色

雛祭り 遠き目をしてうす笑い わが子を抱く母となるまでは

知っている 桃栗三年 柿八年 土に雨得て陽の射してこそ

「今津の桃あんたが礼状書きなはれ」叔母に言われし中一の夏

一九五四年生まれ。

「日の伴」グループ所属。

すべやかに淡く移ろうまるきもの 手に触るるさえ憚られいる

水蜜をふたつ買いてし漱石も まろきふたつを そと抱きけん

硬きままかじらるるのは不本意と うぶげで覆い熟るるを待ちいる

あわ色の実をてのひらにつつみこみ 桃は母なる。太郎を産まん

桃太郎 勇氣靈氣の鬼退治 でもかなわない アンパンマンには

邪氣祓え。厄除けの桃贈りけり 薬あやつる薬師の姉に

呉昌碩も「一タビ喰エバ千万寿」と 「ほんまかいな」と笑いにまかす

画賛に云う「朱顔ニナレル桃ナリ」と 呉昌碩画は誇大広告

旅寝して「モモモモモ」と呼ばれけり 朝の桂林 荷車に売る

色白の桃尻娘と呼ばれし子 それもよからん 今にしなれば

そっと置く たやすく傷む桃尻よ、時見逃すな 世は露なれば

露の世は桃尻のごと傷み易し もじもじしつつ 時は過ぎゆく

作品 A

草刈 十郎

文化の日

・世

上林 節江

町田龍子さん

・海

明治節暗れといわれし伝説のごとく暗れたり今日文化の日
顔のしわ心のしわも伸びたよなそんな気のする小春日なれば
戦争の足音入ら聞こえぬか耳を澄ませと虫ら鳴きをり

十二月八日を知らぬ人ばかり昭和はいたく遠くなりたり

生きて来し九十余年省みて変換キーのあらば押したき

老いてなほ光陰の速さ思ふなりうさぎ忽ちりゆうになりゆく

もんもんと胸につかへしことありて百舌鳥よりわれの猛りたきけふ

河野 繁子

誤作動

・雁

パソコンの誤作動おこす冷やし部屋わたしの時間は早起きの四時
貧血に倒れる危険知らされてそれは困るよ朝の満月

血管の浮かぬ苦勞を掛けており蝶々のような針も刺さらず

手の甲より血を取る他にすべなくて「ごめんさい」と謝りて去る

ベジタリアンにレバーを勧める人ばかり鉄分鉄分頭は錆びて

今月の歌を転がし貧血も頭を去らずジャンケンポイ

一生を菜食主義に生きてきてあともう少しレバーは食めぬ

ふるさとの太平山とはどんな山？もって聞いておけばよかった
ひとり居の家に飾りてありしもの新婚旅行の白黒写真
天職よと介護の仕事にはげみたる一生が見えくるその骨太さ
杖をつき歌会に来たね最後まで短歌が命の笑顔の浮かぶ
おさな日の短歌のつづきし晩年よ教えて八十四歳の胸のうち
美しく色紙に遺る筆跡に顕ちくる姿まだ体温をもつ
口癖の「なんもなんも」は秋田弁？三月あなたの命日がくる

神田 鈴子

忘年会

・大

青澄める冬空のもと集ひたる箕面山荘に心とけゆく

部屋よりの眺めはるかに大阪湾、ハルカス、太陽の塔も光れる

久しぶりの会席料理に舌を打つ上げ膳据え膳の至福のひとつとき

紅葉のときは終りて山道にちおれし落葉がかさと音立つ

歩くとふ元気な人と別れてバスより山の冬景色見る

孫たちより昨年贈られしシクラメンあまたの花芽生き生きと伸ばす

胡蝶蘭の花軸に支柱添はせつつ花ひらく日をひたすらに待つ

菊地栄子 連歌 海

四年ぶりの連歌百韻の進行表 折から秋の時節となりて
連歌の法式まどめしひと揃い原田さんから郵便に受く
読み返す(和歌の詞に準ずるも和歌よりくだけ、漢語・俗語もゆるす)
この度の付け合せ「恋」と「秋」多し恋の長句は定まりがたし
回りくる「雑」の付け合せこころ解きこぞとばかり日常を詠む
一泊する連歌の会の定宿は野蒜の松原津波が櫻う
「あなたの先生じゃない」とお叱りの原田夏子さん百歳に逝く

小林能子 正月—令和六年— 羊

お節セツトに膾や煮しめ手の物を添へて嬉しや今年のお屠蘇
能登震度7とラジオが伝へる窓辺を冷えて暮れてゆく空
正月の家族団欒の喜びを無残に奪ひし能登半島地震
空焦がし朝市通りの焼けるさまテレビにおろおる正月二日
昼の湯に手足を伸ばし目眩ればちろちろ水の地下に落つる音
鉛雲まきあげ龍を呼ぶ風か対岸に悠々房総半島
リハビリの掃路に夕空美しき房総を望む 今日生きてゐる

近藤栄昭 氣比の松原 虹

「心の旅敦賀への道」風うけて海へ発ちゆく少女の像は
松原に白いブラウスワイシャツが卒業アルバム背脊のポーズ
松原の際の若者靴を脱ぐ渚はもうすぐ殻を破るか
貨物船泊まる沖へと起重機が腕のばしいるもうすぐ動く
敦賀港引き揚げ船の掃還港砂の波乗りばちやばち遊ぶ
ポコポコと空気がぬけて海入る氣比の松原机上に日本海
日本海をベットポトルに閉じ込めて大波べた風振って休んで

近藤芳仙 冬きたる 信

川波のいざよふ見れば流木のぬれておもたき秋の暮かな
冬の日は忘れずにくるいつまでも夏日と思ふ日々のこちらへ
凍てしるき冬の真空を白く翔ぶさきに遇ひたり 姿背を正す
かさねゆく年の向かうにかすかなる光も見えて八十歳の春
覚めて見る朝光まふし己が身にけふの一日をもたらしけるる
つとふれし大きく硬き嬬の手 育みたまふ年月の果て
時折は眼鏡をかけて寝ねてをり手触れてはつと我は目覚める

坂上直美 ウクライナ・ガザII 天

オリープは伐られてしまったガザの地は砂漠と化した人は見えない
血を流し魔墟さまよう夢を見たパレスチナでは現実のこと
わたくしが夕餉を食ふこのときも世界のどこかで子供が死んでる
何もしない何もできないわたくしは戦さや飢餓が地上にあっても
大砲や戦車に触れて花にするミダスのような指があったら
美しい歌を求めて生きてきたけれども今は魔墟の歌を
雪よ降れウクライナの地ガザの地に魔墟を死者を覆いつくせよ

坂出裕子 鴨 洛

川べりの桜並木の散歩道もみち踏みゆくしあはせの刻
川べりの道の散歩にコ罗纳禍を忘れて憩ふ鴨を眺めて
湖へ渡らむ鴨のひと群れが水浴びしをり光の中に
長旅も終りに近くよろこびてゐるにからむ追ひかけつこし
楽しげな鴨の姿にしあはせをいただき帰る朝の散歩ゆ
もうすぐに春が来るよと告げてゐる花の水木が蕾いだきて
つぶらなる蕾いつばい枝につけ花の水木が冬を輝く

佐藤道子

バーデー

・甲

「伏せ」覚え「お座り」覚えして見せる素直なバーデー駈け寄りて来る
 飛びついて私のおでこにつつん、「大丈夫ですか」と飼主さん
 幾度も飛びつき顔をなめたがるそんなに嬉しい？出合ひし事が
 この度は三位になりましたと飼主さんしよげて帰りに日ありしかど
 ほめられて元気なバーデー得意気に体寄せ来る飛びついて来る
 気付かず角を曲れば吠えて呼ぶ黒き大きなレトリバーは
 帰るさに遠くから呼ぶバーデーに背を向け歩む心残して

篠原まり子

「イマジン」

・羊

幾度なくラジオより流れ来「イマジン」は十二月八日ジョン・レノンの死
 今でこそ世界平和をイメージに四十年を経てしみじみと
 公園で拾い集めし紅葉黄葉部屋に散らして小鳥と遊ぶ
 微かなる雪の陰あり幼日をふと憶い出すベチカの温もり
 半年は続く降る雪銀世界寒くも恐くもなかった子供
 冬最中生まれしメダカ薄背く涙ぐまじきほどの小さき
 歌ことば思い付きたる安堵にて眠る朝には思い出せず

柴田登志恵

未完

・天

夕空にうすべにを曳く飛行機は高き一点占めて動かぬ
 補助線の一本さえも引けぬまま山茶花は散り議事録未完
 この瞬が真実とばかり地域猫屋根から屋根へ跳び移りゆく
 誰もるぬ家に仮寝の地域猫主人めかして爪研ぐ濡れ縁
 まばたきの間に消え失せし白き猫車道のむかうを音無く歩く
 夕闇のネオンの街の裏路地へボス猫入りゆく夢またまぼろし
 邪悪さを言ふときすでに浮きあがり他人のことなり戦も餓えも

須川千恵香

花の絶景

・眉

あしかがの大藤ドーム幹よちれ百三十年の藤房の丈
 手つかずの杉の根方を埋むるシャガ蝶かともがふ自然の造形
 インクラインの廃坑線路残りゐて柴枯徳ぶや桜花さし交ふ
 萩枝垂れその静寂に身を包む歌人好みの原点ならむ
 水芭蕉が渡り白鳥憩ふがに見上ぐる白馬は残雪深し
 枝垂れ梅鈴鹿の森に紅の厩雨水にその影連ね映ゆ
 ススキの美鹿墟となりたる郷の畦穂による色あひいにしへの色

鈴木結志

團圞裏文化

・福

うたを詠む幻想の世界ゆめ談義團圞裏文化に思いをはせる
 ありのまま理ありのままにわがうたの内在律をリズムに合わす
 禅の道あゆむ説経に利益あり仏の智慧の四攝法得る
 うたという仁義に思う表現に義理とにんじょうかわるものを
 憶測に判断するな自らに言いきかせつつみじかうた詠む
 酔いどれに重ぬわが身の千鳥足雨の暮情に言葉もあらじ
 適不適などことの外書に一途おのれの生きを筆に技練る

関根榮子

記憶

・埼

黒々と防草シートの畑にて重しの水入りポトルのあまた
 手抜きまた料理の変化かいつの間に描鉢すりこぎ使うことなし
 洗いたる浴槽よりまだ香りくる冬至の昨夜の柚子の香りは
 戦禍地の子供の映像によみがえる幼きわれの防空頭巾
 鳴り響く警戒警報にいく度か授業中止に下校となりし
 先生の声高ぶりてランドセル背負うより早く頭巾をかぶる
 きらきらと編隊飛行のB29道端にかがみ見上げしことも

関根和美

人生よもう一版
ライフアゲン

・埼

渡豪するわれのためにと浜松に宿り語らいし三十年まえ
 そうあれは中田島砂丘われもまた街道の名に思い出したり
 浜松の炭火かば焼味わえるさなか刺さりし骨のするどさ
 五年ぶりのわが目に映るうたびとの目に映るわれ いかにかにも
 浜松の天守にのぞむ富士の山ちいさきことは意外のひとつ
 もれきたる駅ピアノさすがに浜松の音色うでまえ心地よきかな
 四十歳むかえるわれにライフアゲン杯かかげたる青き瞳思う

高尾恭子

戦争前夜

・大

雨やみの夕空はれて錆色の月は瓦礫のみどり兎照らす
 戦争をしらぬ子ども神隠しパクスロマーナうたかたの夢
 「戦争の前夜」後ろの正面の線香花火がはじけて消えた
 ひらがなのねがいを託す笹の葉の短冊ひと夜の嵐に散りぬ
 紙くずになった短冊おさなこの夢は踏まれて路上の夜明け
 真昼間を客引きの立つ街底に「福田村事件」を立ち見している
 マスコミに換たれた役者のまなじりが切羽詰まった熱量はなつ

高津砂千子

ヘルベス(三)

・嵐

チャンネルを幾度変えてもどっしりと居座るヘルベスわが主人公
 洗濯を干すためにのみ庭に出る立ち居むつかし足強きはすが
 図書館も本屋も行けぬこもり居に読みし『四照花』胸に沁みくる
 亡き母は痛み訴うわれに向きほほえみ給ういつものように
 ヘルベスの痛みなかなかおさまらぬ「心頭滅却」ほど遠きかな
 暑き日をささざる櫛のさざめきが障子にうつる午後四時になり
 坂道を避けてたどたど買い物に開き直るというにあらねど

滝田靖子

ニベア

・新

あと一首ひねり出すはずの浴槽に体育座りで陽水歌つてる
 カサカサの脚にニベアを塗つてゐる今日のニュースよりよほど大切
 収入の無い身になれば所得税減税のニュース関心もなし
 ガリガリの熊のテレビに映りてだから殺すなど言ふ人のあり
 凶作の山を捨て去り獣らはただ食ふために街をさまよふ
 凶作の山野に飢ゑる獣らを救へなど言ふ大向かうから
 敷石に砕けるとんぐり街路樹の豊穡何の役にも立たず

田土成彦

今は昔

・宙

セロファンがごみ箱の中でほぐれゆくまるで時間が千切れるやうに
 良寛にはなれないけれど脛伸ばし寝られることを喜びとせむ
 今は昔鬼が元氣であつた頃の夜の深さは思ひ得がたし
 柿落ち葉さくら落ち葉と色かへて地球はめぐる地軸傾け
 言ふなれば素足に寒の水を掻く鴨の営為もただ事ならず
 初詣なれば賽銭百円に今年の無事を祈つたりして
 年賀状に今年かきりと添へ書きのあれば背ふ歳となりしか

田土才恵

翡翠色

・宙

取り戻す生きる気力の重たさをしみみに伝う受話器の声の
 こもこもの思い綴れる病床記助まされおり今を生きて
 徘徊の夫の帰りを待ちしとう一夜の話慎みて聞く
 サラリーマンそそくさと行く街路樹の向こういつもの昼食の店
 レースフラワー白く揺れている向こうがわ聞深めつつ時は過ぎゆく
 じゃがいもの土にまみれし古新聞に古閑裕面のふる里と知る
 窓際に冬来てパファイオの鉢戻る翡翠色したカメムシ連れて

玉井綾子

うろこ雲

・羊

スマホ写真を見れば体験済みとなる、うろこ雲の空見たことない子も空よりも画面の中のリアルさを子は抱きしめるスマートデバイス早帰りの日の空にうろこ雲 不穏な気持ちが続り込まれてる A I は雲を分類するだろう何に見えるかでなく雲型に 出勤時は雲を数えて休日は雨戸開ければ空を忘れる

両膝をついてベンキを混ぜている塗装工は良い人の気がする 聞き覚えあり喚起されるものはなし子の出題する B T B 溶液

中島央子

師走

・森

ながらへて迎ふる師走暮参への歩みを今日の行となしたり 香を焚く手によみがへる口惜しさ宿禰に逝きし弟二人 夕つ陽に身のすけるまで公孫樹離散の前の華やきに立つ きはまりて南に低き今日の陽は川辺のほうけし穂すすき照らす 名にし負ふ田子浦産の白子并りりと照りもつ塩加減よし 夕闇の高速道路に霧ふかし前方車輛の尾灯を見つむ 柚子の浮く湯にひたりつつ一人聴く電車の行く音遠く消えゆく

永田進一

有馬記念

・山

恐竜の末裔なりし鳥たちの羽搏くかなた冬夕焼けに ことごとく言葉なりけり今年また惜しき人逝く年の暮 政界を揺るがす疑惑キックバック世間ではいふネコババ五億 返し馬リラックスさせて武豊有馬記念に優勝したり ドウデュース二番人気で武豊ゴール前にて一気に追い抜く 振り返り応援有難う武豊やっぱり競馬はいいなメリークリスマス 久しぶり梅田に出れば地下街のサンタにも遭うほろ酔い気分

永塚節子

白梅

・銀

白梅のつぼみほつほつ丸み帯び何はなくとも明るききざし 会うことのためさかななりし友なれば逝きたることをふとも忘るる 簡単な文字さえ出でずゆるやかに下降線たどる認めがたくも ディスプレイの示す番号四十九に一呼吸し受話機取り上ぐ 出でて来ぬ言葉を探すもどかしさパージョンアップは昔のまま とうとつに甦るもの串だんごあの日あの時あそこのベンチ 枯れ草の間のひと株水仙は朝の光に輝きを増す

仲西正子

遊ぶ

・沖

草陰に獲物を待てる白鷺を映す水面もしばし動かず 泥濘にまっすぐ立てる蒲の穂は天に向いてただ一途なり 直立に立てる蒲の穂さええしは泥の中にて踏ん張る根元 ふらりきて洗足池をひとめぐり遊び上手になることも良し ゆるゆると美術館への路地ゆけば花のことづて上野毛の秋 秋風に誘われ来し上野毛の路地に屈みて会う吾亦紅 ときおりはひとり遊びも道草も織り込みながらわが道をゆく

中村博子

正倉院展

・蓮

観光客溢るる奈良の公園に小雨のなかを穏やかな鹿 この前に奈良公園の鹿を観しは難病に逝きにし菊岡栄子さんと 暗れ女なれどこの日は雨の中正倉院展へ遠出したるよ 観終えたる展覧会に満たされて友らと食める薬膳料理 玄関へ迎えて送り届けられし奈良行き思わぬ激しく疲るる 聖武天皇纏いたまえる衣とう刺し子思いでストールあがなう 在庫の絵ネットオークションへ尋ぬるを教えくれにし内田泰子さん

西堤啓子

破壊

・天

去年今年交わってしまった現実の断層あらわ賀状したたむ
 何かが終わってしまった逃げきれぬサンドバッグに斧たちし夜
 沸騰の身体圧しつけ憤激の荒ぶる息を眼に受けぬ

二人して見し紅葉谷ひとり来て散り果てし見る寒椿燃え
 傷ついた側頭前頭傷つけて破壊のあとに広がる凍野

ままならぬ感情中枢とめられぬ破壊のバルス哀しみを殺す
 感情が死んでしまった夜があり抜け殻おいてふらふらと行く

白子れい

年の瀬

・洛

年の瀬の近づきたれど朝の怪霜も光らず今年は暖冬
 木の葉なべて落ちいるを踏むあさ朝の一步一步に今日の覚悟を
 せき止められ流れなき疏水の底に佇ち鷺の一羽が今朝の吾を待つ
 久しぶりに西本願寺に詣でたり吾の短歌が飾られると聞き
 絵の描かるる皿に記され並べらる吾の拙き短歌四首

ありがたしあ有難し何気なく詠みて結社誌に記さるる作
 年の瀬はことさら人の恋しくも父・母・夫なべては異界

ばばりょうこ

三体のみほとけ

・鹿

金の花粉屑にかからせしひと訪いでとつきに宗教のおすめされた
 ときに行きつ戻りつの勧誘に初心者らしきといじらしく聴きぬ
 然はあれど「ゴメンナサイ」と伝道の間際とらえて せめてものと コーヒー
 金木犀の樹下を去りゆく人の背にくぐもりにいる落胆の影
 カルミナ・プラーナを聴きつつ人生の哀感にとっぶり 今 この時の
 火葬場で教えられたり 人体には三体もの佛おわしますとのこと
 喉佛・胸佛・且つ指佛・御教示に添いてお骨納めする

浜谷久子

冬の畑

・地

冬入りをなおも色づくミニトマトに種は採ったと声かけている
 単人瓜実の生り遅く早も霜凍える朝を急ぐ収穫

どこにもない苺の旨さと喜ばれ来春目指すも苗を絶やせる
 分け給う苺の苗を押しただく殿の達人につね助けられ
 完熟の味粒苺を配る春を思い描ける苗を賜る

植え替える苺の根つき葉を赤く踏ん張る力冬を越さんと
 収穫物喜ぶ子らを想いつつ気力足腰齡とるばかり

檜垣美保子

空

・昴

三日月と星がひとつの夜明け前空を見あげて橋わたりゆく
 檜の木の間とふれあう枝先に雨しずくしてひかりを宿す
 かきたるたまねぎに触れ外からは見えぬ傷みを言い当てし母
 大鍋に年越し蕎麦を茹でる夜まどのむこうの外灯うるむ
 元旦の神社の鳥居をくぐるたび立ち止まりこうべを垂るる少年
 こともらの遊びつくしてパルバス何事もなかったような仕舞湯
 世の中に怒ること多き子がきょうは画面の駅伝選手にエール

福田庸子

地球の怒り

・今

晩秋と括るひととき稜線を輝かせゆく落葉樹群
 稜線を占むる木木ありひとときの光に燃ゆる晩秋の午後
 枝に残る葉をたゆたはせゆく風のはたてゆるゆる秋雲のびて
 アルプスの白さ見放くる畑に立ち八十八歳は今も耕す
 鱒より鱸に代はりし刺身種生協カタログも海洋異変
 欲望の国土拡張人間の為したる戦さ地球が減ぶ
 災害と紛争の世は水消ゆる地球の怒りを人は気づかず

藤田美智子 裸木

・新

煙となるひとのためかと思ふほど秋空高し雲ひとつなく
うつすらと白き半月浮かびたり暖の欠片を残しあること
木には木の構へあるべし雪空に裸木の枝太さを増して
皺深き水檜の樹の肌に触る父と言葉を交はす思ひに
隔たりし人を恋ふなり灰色の雲に濃淡生るる夕べを
許せれば心明るみゆくならむ新月の夜に光るベガス
忘れてもよきこときつと多からむリニクに溜まるハンカチ、ティッシュ

藤森巳行 傘寿

・銀

山坂を越えて傘寿を迎へたり米寿をめざして愉快に出発
傘寿すぎアイデンティティーを大切に我が人生を短歌に綴らむ
黄金のチャンチャンコ着て一族と写真にをさまる傘寿の祝
娘からチャンチャンコと帽子贈られて記念写真にピースする我
これからの一日一日大事なり今日を越えゆく自分でありたい
骨格は海兵たりし父ゆづり大病せず傘寿を越えたり
貧しくも我を丈夫に育てくれし母に感謝す傘寿を迎へて

船田清子 白楊並木

・天

はやばやと黄砂到来ノ日本ではシカメツ面にて迎へられるる
さにあらずわれには嬉しき来訪者シルクロードの語り部なるに
はるかなる天山・ゴビのよみがへる二度とは行けぬシルクロードよ
白き白きゴビの砂漠の月の夜ノあの清浄さとはるけき無限
白楊の白き並木よ 紅のつば花咲かすタマリスクの野よ
西域にあまた残れる壁面に見ゆる楽人・楽器・動物たのし
飛翔許可得なば再び二人してシルクロードの壁画巡らな

本元由美子

生きる喜び

・岡

COVID 感染者数の推移見て怯えし日々よ 今はガザの死者
ホキ美術館の「未来」の前に震撼す 「生きる喜び」戦場の人も
ウィーナスに邂逅したるらし「月陰り」生島浩にわれはふるへる
冬枯れの河原の芒を村人は堆肥にせむちとチェンソーに刈る
冬ざれの川岸歩めば陽にてれる草もみちに早や赤き芽の出づ
一年を無事に過せしを感謝してもうひと頑張りと煤払ひする
初夏の木漏れ日のなかみどりこを抱きてわれは母となりたり

牧 雄彦

熊野路

・大

山また山 熊野は山に神が棲み峽にはヒトが寄り合ひて住む
神々の棲む山並の果てしなしパスはゆつくりカーブを曲がる
おもむろに霧はなだりを追ひのぼるあとには杉の緑いる濃し
山裾に寄り合ふ集落その姿ややにあらはれ霧のほりゆく
十津川に架かる朱色の橋の上ひとり男が川面を見つむ
時折にはかに曇り雨粒が十津川の面に水紋散らす
日が差せばたちまち緑が光りそめ山はしづかに濃きかげ作る

松浦禎子

言葉にすれば

・羊

同室の耳遠き人と看護師の会話は合わず行ったりきたり
内視鏡にて組織の表面削るというわたしの手術を言葉にすれば
用のなき老年を生き年の暮術後のからだ穏やかにすぐ
電話にて明るき声に交わしいる術後のからだ異状なければ
FMの夜のラジオをひそかにもひとり楽しむいつまでのこと
一身の最後の呼吸あるかなきラヴェルのポレロ鳴り止む前に
紗千子さん雲の上より降りてくる夢の続きを覚めておもうも

松本多摩子

夢科

・桜

氣を揉みし夢科に雪なけれども露天風呂より白き赤岳
東京になんでもあると思うからふるさとじまんのみかん送れり
八十四のサル団子は日本一今年一番冷えた日の朝

デコピンが世界に広がる幼き日やったと言えり日本に住みて
パイパイと園児の声の重なりて暮の一日がもうすぐ終わる
長い長い貨物列車が大橋を四国へと走る師走もまちか
諏訪大社諏訪湖をめぐり信州そば子らと楽しやクリスマス三日

三浦好博

プレゼント

・眺

ガザにああ日々死ぬ子らよイスラエルもパレスチナさへ知らないままに
正義には別の正義があるものか常に対義語は罪悪である
助けむと重機が動くあの重き瓦礫の下にも幼き子らが
足や腕に互に名を書くガザの子ら本当の理由教へられない
冷血にも子らや女に爆弾を落とす行為のどこが「戦闘」
クリスマスプレゼントだよユダヤよりガザへ爆弾と破壊をあまた
ニッポンはとうの昔に先進国脱落なりてそれも又よし

三木まり

想

・昂

いつからか信じなくなりそれはいつ今日の続きの明日があると
途切れなく明日があると疑わぬ幼な明日に虹よかかれ
虹よ虹 幼なのだる道のはて雨降る街に光降りそそぐ
どこまでも続く道ならどこまでも歩いて行こう一人で
晴れ渡る真冬の空の青ならば鬼籍の人に今日は逢える
今はもう会えない人に贈るもの明るい空から風花が舞う
言葉では言えない想いあふれこぼれ絶え間なく舞う風花うつ

宮本靖彦

初詣で

・凌

四十余年つづけし元旦初詣で今年は卒寿と息子の二名
門戸厄神マスクの減りし参道の寺塔をめざし人わけて行く
我が星の末吉なるを喜びて本堂埋むる列に加はる
厄神ゆ歩みし棋津の清荒神今は電車で宝塚まで

御殿山の坂道厳しく名に合はず登りて荒神参道に出る
参道は人人遅々と蟻歩み手浄め場も並びて待ちぬ
寺詣で帰途参道の名じみ茶屋おでんとビールに疲れをいやす

三好聖三

蛸蝮

・伊

ひよどりが寄れば忽ち飛び立てるすずめ目白の一群がある
冬ばれの山路をゆけば枝先にムラサキシキブ二三粒あり
家出より帰らし母に寄り添える子猫ありたり二週間経て
巡洋艦愛宕に乗れる人逝きぬ百歳を過ぎし歳晚
そういえばそういう人も居たよねと言われるほどの私で良いと
アンニユイは蛸蝮様に横たわり三畳の部屋を占めて動かす
わが朝はつたなく明けて歯を磨き廁へと行き物を干したり

御代田澄江

戦の影

・茨

地球上全てを覆ふ戦の影東西南北世は騒然たり
爆撃と飢餓に泣く児ら目交に立ちて眠れずユニセフに寄す幾許
東海原発ゆゑ、3キロ航空障害灯見ゆる地に住む事あらば避難困難ならむ
災難に遭ひたる友に見舞送れば生死の際にありとの手紙来
驚きてまた何かせむ友の命引き止めむとて為す術迷ふ
心弱りは誰にもあらむ吾もまた家居為しあれこれテレビに慰む
この時期に視るは「忠臣蔵」長谷川一夫・山本富士子の芸にひた酔ふ

もとむらしげと

手水鉢

・そ

手水鉢を洗いて待てり猫たちの腹に満ちゆく滑らかな水
 労働に疲しく家族に優しかりし父の形見の栗の実を拾う
 脛に傷もたぬならむか容赦なく人を責めいる言葉危ぶむ
 鹿兒島に來た証だと県外の客はよろこぶ噴煙あがれば
 武器輸出解禁さるる小さき記事裏金ニュース踊る紙面に
 困中の子ら騙されて幸せな夜が明けたりクリスマスの朝
 レクイエム聴きて帰し寒の夜の妻はほがらに床を延べたり

桃原佳子

冬

・沖

眠たさを払い厨に立ちおれば朝日が霧を融かしゆくなり
 病院で親しく声をかけられる名を知らぬまま半年過ぎぬ
 霜害の予報を聞き急ぎ夫と擁ぐ初生りの黒南瓜五個
 今日もまたいつもの暮しのありては黄の色増しぬ苦名の花は
 冬色に日々交わりゆく名残り田に羽ゆるやかに鶯の降り立つ
 スピーカーの音量落とし回収の軽トラの行く土曜日の午後
 黄鵠の声聞きながら庭を掃く明日も為し得ることを信じて

山下雅子

晩年の耳朶

・習

踏みしめて常の道ゆくちよちよこと小犬軽らにわれを越しゆく
 踏切りに鳴り出す鐘の嬌々と晩年の耳朶にしみ入るしはし
 駅前のマツモトキヨシ店売出しの貼紙なべて片仮名なり
 片仮名の増すこの頃は雅びなる大和言葉にいよいよ魅かれて
 乗客は見えねど夕日満席のバスを見送る駅前通り
 病む夫と老人施設に転居すと幼馴染の麥らぬ江戸弁
 あかあかとして増す柿を育める深たる一樹を見上げていた

山野幸司

正月

・沖

正月の賑わいは去りテールブルに冬の陽やさしみかんが香る
 賑わいの去り居間ハンナ・アーレント読む窓の先白きワビスケ
 ゆっくりと時の流るる正月の大地とよもす能登地震夢
 鬼ごっこ八人の声静まれり部屋にほのぼの寝込む子どもら
 航空機炎上の中脱出の人ただ走る生へとならん
 酒飲めぬ心も晴れぬ正月か地球の上の炎は消えず
 正月に起こりし悲鳴地震火事それでも止まぬ戦下の炎

山本

孟

ガザを知りて

・大

日本の老衰の記事見るにつけガザの死者たち血にまみれるる
 空爆に一般家庭を殺戮せし一神教の国の兵士ら
 戦争は殺殺奪奪人間が化け物と化し人の世失せたり
 血を流し瓦礫の中からガザの母抱きし子供を生かしめんかな
 高層の窓から見らるる町並を戦さなき国秋の雲行く
 まのあたり病状語る友の目は命見つむる意志の輝き
 「連れ合ひ」と妻を言ふ友 夫婦して作家の家は「あつち」とも言ふ

養学登志子

永遠

・凌

眉間の皺そつと撫ずれば消えにけり父のねむりのやすらけし永遠
 今日幾度ありがとうと言つただらう楽しんで生きしかふとそう思う
 絶食の検査のあとの空腹感あるやあらずや無なることかも
 何するということもなく茶を入れてこの夜が明けぬことなど願う
 午前三時三つ四つ灯りし窓のあり起きているとう小さな叫び
 ちははのかたえに何時も居しように父母の衣まとうひとの微笑み
 セーターは母のジャケットは父のもの抱かるることまとうよろこび

横田 敏子 大地震 ・福

元旦の大地震、二日の飛行機事故まさか、まさかと釘付けとなるフラッシュバックしそうな気持ちに蓋をする 大丈夫もう大丈夫だよ大惨事続くテレビを消しました 祈ることしか出来ないわれは紅梅は夏の暑さに堪えしか言い訳ほどの雷を付けぬ
余所行きと大事に仕舞いしセーターを広げて冬の日差しを当てるNHK女子アナ達のブラウスのボウタイ結び懐かしきかな
行先は娘の家なれど新幹線シートに座れば旅人気分

吉永 惟昭 つなみ ・熊

ありうべきことにありせば元旦の「つなみ警報」背筋の氷るま近ならどう対処せん大つなみ 死ねと言われしことに思わる我が身体かなわす妻は車椅子死を選ぶほか道はなからん幾度も逃れし経験ありたれど用意は懐中電灯一つ
地震国の運命知りつつ復興に生きてしゆかなプレートの上
災害は忘れた頃にやってくる復興という願いを込めて
二つ目はまた航空機の事故多難。人災ならば何をか言わんや

磯田 ひさ子 喜捨 ・森

三脚に鍋をつるしてラッパ吹く救世軍の立つ暮れの街
紅白の襷をかけて明治より変らぬスタイルの募金活動
救世軍の日本の本部は神保町 地中海の本社に近く
『平民の福音』山室軍平著父の書棚に長くありたり
商ひを生業とせし亡き父の心に触れしは何の弾みか
父も逝き家も失せたるからんどう一冊の書も行き方知れず
わづかなる喜捨に心の浄まりぬぶつきらばうにラッパ鳴り出づ

市原 やよひ 南天 ・萬

面会の予約のメモ出で来たりかなわす夫は逝つてしまぬ
これからの時間は自分のためにとぞ言い残し子が帰るゆくなり
どれ程の時間が我に残れるや追いかけて早き日没
なつかしきベイブリッジ見えて来ぬ再び遺骨強く抱きしむ
幾そ度通りし橋か「あなたベイブリッジですよ」遺骨に告げる
今日からここがあなたの住まいです芝の広がる丘の上です
陽の動き師走となりし証かと障子に切り絵の如き南天

梅本 武義 老いの安穩 ・羊

藪を掘る母思い出す冬枯れの段々烟跡夕影の里
冬の夜の老いの目覚めに朝遠く夢と現の行き交い楽しむ
受話器より怒声を浴びし頃のあり今朝ふと思う老いの安穩
会う度に認知症無きを自負しては同じ話をする義母百歳
何時しかに囲碁も将棋も弱くなり勝負事には興味をなくす
四病院に通うわが身を省みず大吟醸に溺れし年の瀬
孫までも新車買いたり貧乏が身に沁む我の育ちを知らず

大 浪 美 雪 みかん ・森

コンピュータ誤作動なすかと大騒ぎ二十一世紀もうすほり積む
植木屋の荷台を覆ふ唐楓あかあか燃えて秋を運べる
抜歯後の不安の内に見る彩雲大丈夫大丈夫と微笑みて消ゆ
隣りからがよく見えてゐる小さきみかん食べられるかとやはり聞かれる
実生なる福来みかん初生りはピンポン球よりちひさきちさき
歌友より戴く菓子にも使はるる福来みかんほのかに甘し
花のなき庭に福来みかん生り小さき灯りたわわにともす

奥田陽子 無韻

・羊

黄の色の園かきこそと歩みきて短髪の少女きびすを返す
 いまだ落ちぬプラタナスの葉黄ばみつつ揺れいる下を人の歩める
 黄の色の蝶ゆき戻るプラタナスの樹樹のあわいに探し物して
 秋蝶の黄に触れんとす幼子のかかやくものをひたに追いゆき
 駆ける子に手を伸べる父居ねむれる老人無韻の公園にあり
 黄の蝶を追える幼と思いしがはや水の辺に手指没せる
 プラタナスの樹樹のあわいをゆき交える蝶翻り去りてしまえり

小野雅子

秋

・羊

「自由にお持ち下さい」と書かれある葉もらつてくる文化祭
 亡き人の育てゐたれば迷はずにムスカリ描く葉を選ぶ
 親しくはなかつたけれど折にふれ花にふれては思ひ出すひと
 花の穂の暗きくねなる吾亦紅 秋空を背に色かがやかす
 店で出るデザートやう秋はやく小さき柿の半分を剥く
 夕暮れのやうなる日射しの午後三時わが生まれにし秋はさびしき
 老いをうたふわがうた過ぎし日となりて深まりてゆく老いとこの秋

久我田鶴子

月と鳥

・羊

おとうとが姉貴と呼びてゐしころのわたしは今もあるのだらうか
 二年経てなほ幼生の山椒魚ちひさき鰐をさやさや揺らす
 先刻まで雲にまぎれてゐし月か光をまとひなかざらにある
 ひつじ雲のちらばりゆきし空に月 あらはにははづかしげなり
 老いびとの三人身を寄せ暮らす家三人といへどしづかと言へり
 閉ざされてゐるのではない老年の三人の暮らし鳥声のなか
 あちらからこちらと声のゆきかひて目白のよろこび木の間より来る

シリーズ「第一歌集を読む」ご案内

◆第一期・対象歌集と執筆者

- ・河野繁子「雁来紅のうた」(柴田登志恵)・八乙女由朗「阿武隈川」(三好聖三)・中島義雄「銀箱日記」(石田明彦)
- ・市原志郎「ひよどりの風景」(もとむらしげと)・田土成彦「遠隔会話」(阿藤たつる)・ばばりようこ「星を釣る女」(西堤啓子)・虎谷信子「葛家のうた」(丸山 修)・市野千鶴子「あわき茜」(藤田しん子)・菊地栄子「山川みどり」(高橋啓子)・白子れい「疏水のほとり」(仲西正子)・小西美智子「はなかつみ」(大寺智子)・浜本美美「夢の川」(光広祥子)

◆第二期・対象歌集と執筆者

- ・田土才恵歌集「かざぐるま」 泉 嘉穂子
- ・牧 雄彦歌集「誰もるぬ部屋」 ふじとよひこ
- ・辻 彌生歌集「霧しうずまく」 色井静代
- ・中島央子歌集「桃李」 伊東ミイ子
- ・近藤良子(芳仙)歌集「花霞」 石塚貴美恵
- ・橋本敏子歌集「いくとせを」 小原香里
- ・山下雅子歌集「陽光」 穴戸千佳子
- ・田村利子歌集「霧の緞帳」 横田敏子
- ・小野雅子歌集「花筐」 岩井久美子
- ・中村博子歌集「流れ逝くもの」 三浦好博
- ・鈴木文字歌集「西窓の彼方」 滝田靖子
- ・船田清子歌集「藍の時」 辻田聡美

以下、第三期へと続く予定です。